

LEVEL

5

桜さくらの森もりの満開まんがいの下した

坂口安吾さかぐち あんご

編集へんしゅう ぷりきゅあんのん

桜さくらの森まの満開かいの下

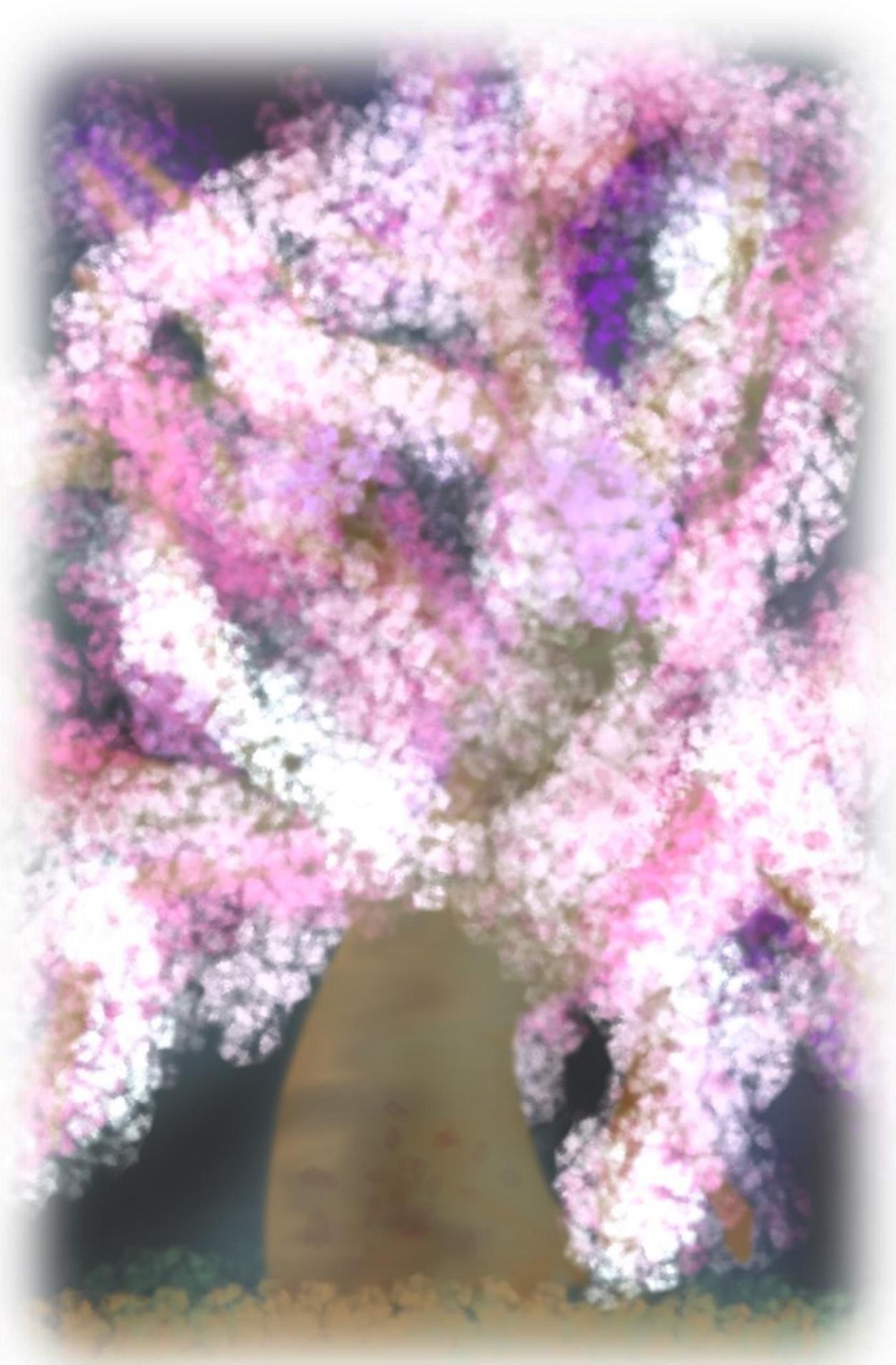


桜の花が咲くと、人々は酒を飲んで、団子を食べ、花の下を歩きます。景色がきれいだな、とか、桜がきれいだな、とか、浮かれて楽しくなりますが、これは嘘です。

楽しいというのは、江戸時代から後の話で、大昔は、桜の花の下は怖いとは思っても、綺麗だな、などは、誰も思いませんでした。

桜の下から人間がいなくなると、おそろしい景色になります。





千年前、鈴鹿峠の道では、旅人は、桜の花の下を通らなければいけませんでした。

花の咲かない時は良いのですが、花の季節になると、

旅人は、みんな花の下で気が変になりました。

できるだけ早く花の下から逃げようと思って、

違う木の方へすぐに走りだしたものです。

一人だとまだ良いのです。なぜかというと、

花の下からすぐに逃げて、違う木の下へ来ると、

ホッとして、それですむからです。

しかし、二人だとだめです。なぜなら人間の足の速さはみんな違って、

一人が遅れます。



鈴鹿峠
すずかとうげ

「オイ待^まつてくれ。」

後^{あと}から必死^{ひっし}に叫^{さけ}んでも、みんな気がくるったように、

友^{とも}達^{だち}をすてて走^{はし}ります。

それで、鈴鹿^{すずか}峠^{とうげ}の桜^{さくら}の森の下を通ると、

今^{いま}まで仲^{なか}のよかった旅^{たび}人^{びと}の仲^{なか}が悪^{わる}くなります。

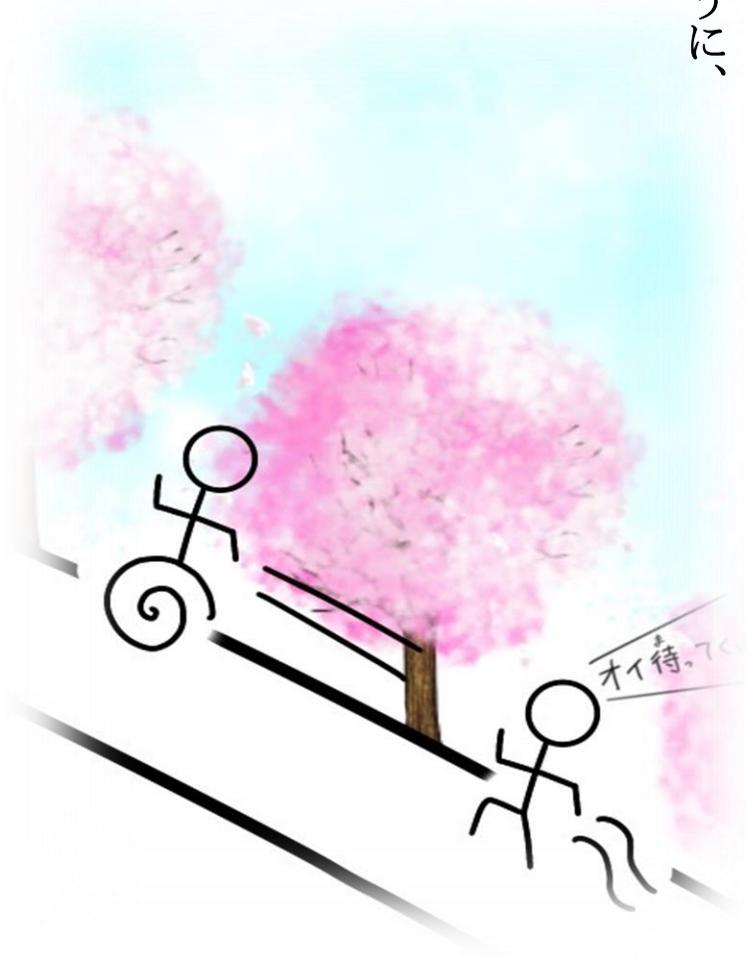
相^あ手^{いて}の友^{ゆう}情^{じょう}を信^{しん}じなくなりま

す。そんなことから、旅^{たび}人^{びと}も自^し然^{ぜん}に、

桜^{さくら}の森の下を通^{とお}らないで、わざわざ遠^{とお}まわりの、別^{べつ}の山^{さん}道^{どう}を歩^あくようになりま

す。やがて、桜^{さくら}の森は街^{まち}の道^{みち}をはずれて、人^{ひと}の子^こ一^{ひとり}人^{ひと}通^{とお}らない、

山^{やま}の静^{しず}けさの中^{ちゆう}に取^とり残^{のこ}されてしまいました。



何年なんねんか後あとに、この山ひとに一人ひとりの山賊さんぞくが住すみはじめました。

この山賊さんぞくは、ずいぶんひどい男まちで、街まちの道みちへでて、容赦ようしやなく旅人たびびとの着物きものをはぎ、人ひとを殺ころしました。

しかし、こんな男おとこでも桜さくらの森もりの花はなの下したへくると、やっぱり恐ろおそしくなつて、気きが変へんになりました。



花の下では、風がないのに、ゴウゴウ風がなっているような気がしました。

そのくせ風が少しもなく、一つも物音がありません。自分の姿と足音ばかりで、それがひっそり冷たい、そして動かない風の中につつまれていました。

花びらがボソボソ散るように、魂が散って、いのちがだんだん、弱まっていくように思われます。

それで目をつぶって、何かを叫んで逃げたくもなりますが、目をつぶると、桜の木にぶつかるので、目をつぶれません。

だから、さらに気が狂ったようになるのです。

けれども、山賊は、おちついた男で、怖いものがない男ですから、これはおかしいと考えたのです。

ひとつ、来年、考えてやろう。そう思いました。今年は考える気がしなかったのです。来年、花が咲いたら、そのとき考えようと思いました。

毎年そう考えて、もう何十年も経ちました。今年もまた、

来年になったら考えてやろうと思って、また、年が暮れてしまいました。

そう考えているうちに、初めは一人だった妻が、もう七人に増えました。

八人目の妻を、また、街道から、さらってきました。

その女（八人目の妻）の夫を殺して、

その着物も一緒に盗ってきました。



山賊は、**女**の夫を殺す時から、何か変だと思っていました。どこということとは分からなかったけれども、へんてこでした。

山賊は、はじめは、男を殺す気はなかったのですが、着物を脱がせて、

「とつとつと失せろ。」

と、蹴飛ばしてやるつもりでした。

しかし、**女**が美しすぎたので、

つい、男を切りすててしまいました。

それは、山賊自身にも、**女**にとっても、

びつくりな出来事でした。

山賊がふりむくと、**女**はしりもちをついて、

彼の顔をぼんやり見つめていました。



「今日からお前は俺の妻だ。」

と言うと、女はうなずきました。

手を取って女を起こすと、女は言いました。

「私は歩けないから、おんぶしておくれ。」

「わかった、わかった。」

と、山賊は、女を軽々と背負って歩きました。

険しい登り坂へきて、

「ここは危ないから、降りて歩いてもらおう。」

と言っても、女はしがみついて、

「いやよ、いやよ。」

と言って降りません。



女は、しがみついたまま、訊ききました。

「お前まへのような山男やまおとこが、苦しくるがるほどの坂道さかみちを、どうして私わたしが歩けるものでしょうか？」
「そうか、そうか、よしよし。」

男は、疲つかれて苦くるしくても、いい気分きぶんでした。



山賊は、この美しい女との、楽しい未来を考え、とけるような幸せを感じました。

彼は、前の山、後ろの山、右の山、左の山、と、ぐるりと一回転して女に見せ、

「これだけの山という山が、みんな俺のものなんだぜ。」

と、得意げに言いました。

しかし、女は、そんなことには、興味がなさそうです。彼は残念で、

「いいかい。お前の目に見える山という山、

木という木、谷という谷、その谷からわく雲まで、

みんな俺のものなんだぜ！」

と、偉そうにしました。



でも、女は言いました。

「早く歩いておくれ！お前はもつと急げないのかえ？走っておくれ。」

「この坂道は、俺が一人でも、そうは走れない場所だよ……。」

「お前、見かけによらず意気地なしだねえ。」

「なにをバカな。これぐらいの坂道が。」

山賊は、身体がバラバラになったように、疲れていました。

やっと、山賊の家の前へ着きました。

山賊は、目もくらみ、耳も鳴り、声も出ませんでした。

家の中から、七人の妻が迎えに出てきました。

七人の妻は、今までに見かけたこともない**女**の美しさに

驚きました。

反対に**女**は、七人の妻の汚さに驚きました。

女は気味悪がって男の背へ隠れ、

「この山女は何なのよ？」

「これが俺の、昔の妻なんだよ……。」

と男は困って、「昔の」という言葉を付け加えました。

とつさの返事にしては、良く出来ていましたが、

女には通じません。

女は厳しく言いました。



「まあ、これがお前の妻かえ？」

「それは、お前、俺は、お前のような可愛い女がいるなんて、知らなかったのだからね。」

「あの女を斬り殺しておくれ。」

女は、いちばん顔形のきれいな一人の女を指して、叫びました。

「だって、お前、殺さなくても、女中だと思えばいいじゃないか。」

山賊は言いました。

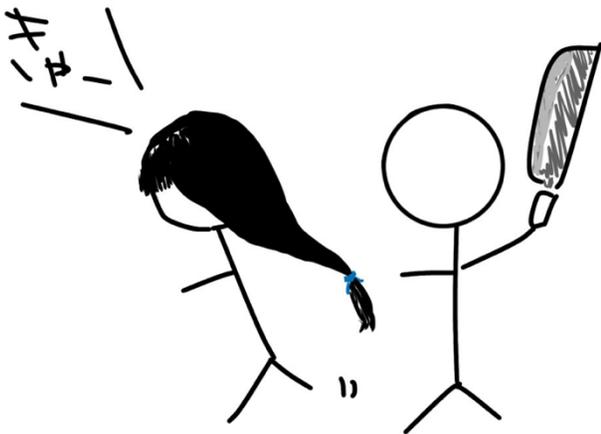
「お前は、私の夫を殺したくせに、自分の妻が殺せないのかえ？お前は、それでも私を、妻にするつもりなのかえ？！」

男の口から、うめき声をもれました。

男はとびあがるように一踊りして、

指された女を斬り倒していました。

女は続けました。



「この女よ。今度は、それ、この女よ！」

男はためらいました。しかし、すぐ歩いて行って、

女の首へザクリとダンビラを斬り込みました。

クビがまだコロコロと転がっている間も、

女のツヤのある透きとおる声は、次の女を指して、

美しく響いていました。

「この女よ。今度は！」

指された女は、両手で顔をかくして、

「ギャー！」

という叫び声をあげました。その叫びとともに、ダンビラは宙を閃いて走りまわりました。

残る女たちは、一斉に立ち上がって、逃げ出しました。



「二人でも逃したら許さないよ！木の陰にも一人いるよ！あつちに一人逃げて行くよ！」

男は刀をふりあげて、山の林をかけ狂いました。

一人、逃げおくれ、しりもちをついて、動けない女がいました。それはいちばん醜い、ビツコの女でした。

男が逃げた女を一人残さず斬りすて戻ってきて、このビツコの女に荒々しくダンビラをふりあげますと、

「いいのよ。この女だけは。これは、

私が女中に使うから。」

「ついでに、やっってしまうよ。」

と、男。



「バカだね。私が、殺さないでおくれと言うのだよ。」
「アア、そうか。」

男は刀を投げすてて、屍もちをつきました。疲れがどつとこみあげて、目がくらみ、自分の屍が、土から生えたかのようにでした。

そして、ふと、一つも物音がないう静けさに、気がつきました。

男は、急なおそろしさがこみあげ、ギョツとして振り向きました。

男は、悪夢からさめたような気がしました。

目も、魂も、自然に、女の美しさに吸い寄せられて、動かなくなっていました。

けれども、男は不安でした。

どういう不安だか、なぜ不安だか、何が不安だか、彼には分からないのです。



「なんだが、似たことがあったな。」

と、彼は、思いました。

「似たことが、いつか、あった、それは……。」
と彼は考えました。

「アア、そうだ、あれだ。」

気がつくとき彼はびっくりしました。

桜の森の満開の下です。

あの下を通る時に似ていました。

どこが、何が、どんな風に似ているのだから、

分かりません。

けれども、何か、似ていることは、たしかでした。

女は、大変なわがまま者でした。どんなに心を込めたご馳走をあげても、必ず、文句を言い

ました。

彼は、小鳥や鹿をとり山に行きました。猪も熊も取りました。

ビッコの女は、木の芽や草の根をさがして、

一日中、林の中を歩きました。

ただし、このご馳走に、女が満足したことはありません。

「毎日こんなものを、私に食えと言うのかえ？」

男は言い返しました。

「だって、とびっきりのご馳走なんだぜ。

お前がくるまでは、十日に一度くらいしか、

これくらいのもは食わなかったものだ。」



「お前は、山男だからそれでいいのかもね。私の喉は通らないよ。こんなさびしい山奥で、せめて、食べる物だけでも、都ぐらいおいしい物が、食べられないものかねえ？」

女の発する言葉の意味が、男には分からなかったのです。それをどうしてよいか、もどかしさに苦しみました。



今まで、都みやこからの旅人たびびとを何人殺ころしたかは覚えていません。都みやこからの旅人たびびとは、金持もちで持もち物ものも、豪華ごうかです。

つまり彼かれは、都みやこについては、それだけが、知識ちしきの全部ぜんぶでした。

都みやこは、豪華ごうかな持もち物ものを、持もつ人達たちのいるところであり、彼かれは、それを奪うばう、という考いえ以外がいありませんでした。

都みやこが、どほうちの方角がくだということすらも、

考ひつえる必要ようがなかったのです。

女は、櫛くしやこうがいこうがいやかんざしべにや紅べになどを大だい事じにしました。

男おとこは、はいっとして、たいめ息いきをもらしました。彼かれは納得なとくさせられたのです。

こうして、一ひつの美なが成なりたち、その美なに、彼かれが満みたされているのでした。

それを、彼かれは彼かれらしく、一ふつの不まじ思議ぎな魔術まじゆつとして、納得なとくさせられたのでした。



そして男の心に、都みやこを怖こわがる心が生まれていました。

その怖こわさは、恐怖きょうふではなく、知らないということに對する恥はずかしさと不安ふあんでした。自分は物知ものしりだと思おもっている人が、未知みちの事柄ことがらにいたく不安ふあんと恥はずかしさに似にていました。

女が「都みやこ」というたびに、彼かれの心は怯おびえ上がりました。けれども、彼かれは目に見える何物なにもも怖こわいと思おもったことがなかったのです、怖こわがる心に慣なれていなくて、恥はじる心も知りませんでした。

そして彼は、都みやこに對して敵意ていきだけをもちました。

女は言いました。

「お前が本当に強い男なら、私を都へ連れて行っておくれ。お前の力で、私の欲しい物、都の素敵な物を、私の身の回りへ飾っておくれ。そして私に、心から楽しい思いをくれることができるなら、お前は本当に強い男なのさ。」

「そんなの簡単だ。」

男は、都へ行くことにしました。彼は、都にある全ての櫛や着物や口紅を手に入れて、女にあげるつもりでした。男には、自信がありました。

一つだけ気になることがありました。まったく都に関係ない別なことでした。

それは、桜の森でした。

二、三日後に、桜が満開になりそうでした。

「今年こそ。」

と、彼は考えていました。

「桜の森の満開の中で、動かないで座っていてみせる。」

彼は、毎日、内緒で桜の森へでかけて、つぼみを見ていました。

女は、出発を急いでいました。

でも、彼は、女に言いました。

「あと三日、待っておくれ。」



「はやくしておくれ。都が私をよんでいるのだよ。」
と、女は男に言いました。

男は、こう答えます。

「それでも約束があるからね。」

「お前がかえ？この山奥に、約束した誰がいるのさ。」

「それは、誰もいないけども、ね。でも、約束があるのだよ。」

「それはマア、珍しいことがあるものだねえ。」

誰もいないのに、誰と約束するのだえ？」

男は、嘘がつけなくなりました。



男は、理由を話します。

「桜の花が咲くのだよ。」

「桜の花と約束したのかえ？」

「桜の花が咲くから、それを見てから出掛けなければ
ならないのだよ。」

女は、首をかしげます。

「なんで？」

「桜の森の下へ、行ってみなければならぬからだよ。」

「だから、なぜ行ってみなければならぬのよ。」

「花が咲くからだよ。」

「花が咲くから、なぜさ。」



「花の下は、冷たい風が吹いているからだよ。」

「花の下にかえ？」

「花の下は、ずっと続いているからだよ。」

「花の下がかえ？」

男は分からなくなつて、怒りたくなりました。

すると、女がこう言ったのです。

「私も、花の下へ連れて行っておくれ。」

「それは、だめだ。」

男は、はっきりと言いました。

「一人でなくちゃ、だめなんだ。」



三日目がきました。

彼は、内緒で出かけました。桜の森は満開でした。

花の下で、強い風が吹きました。

彼は叫んで、走りました。

何もないのが怖かったです。彼は泣き、祈り、ただ逃げようとしていました。

そして、花の下から出たことがわかったとき、夢から覚めたときと同じ気持ちになりました。

夢と違ったことは、本当に息がしにくくなっていることでした。



男と**女**とビッコの女は、都に住みはじめました。

男は毎晩、**女**に頼まれて、人の家へこっそり入りました。盗んだ着物や宝石は、**女**にあげました。しかし、**女**が一番欲しがるものは、その家に住む人のクビでした。

彼等の家には、すでにたくさんのクビが集められていました。

クビは並べられ、つるされているものもありました。

男には、クビの数が多すぎて、どれがどれだか

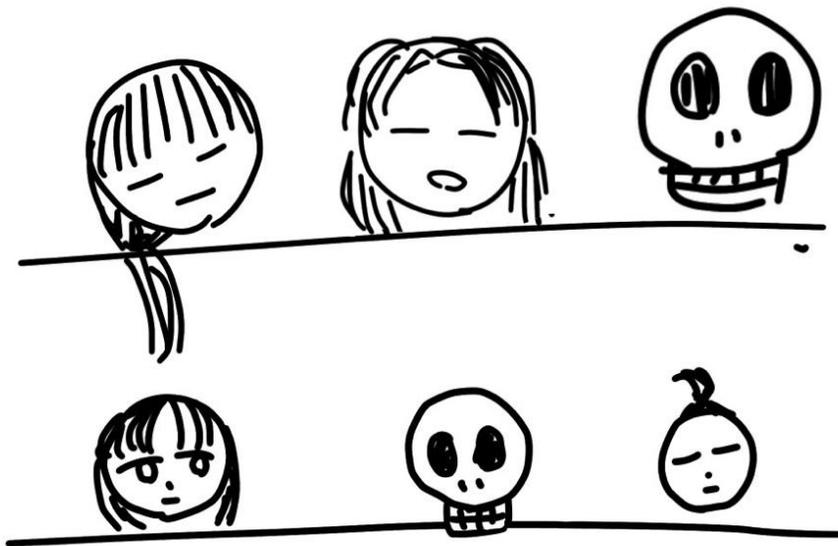
分かりませんでした。

でも、**女**はちゃんと覚えていました。

毛がぬけて、肉がくさり、骨になっても、

どこのだれということをおぼえていました。

男やビッコの女がクビの場所を変えると怒りました。



女は、毎日クビで遊びました（やっちゃんだめだよ）。

たとえば、こんな物語をつくって、クビで遊びました。

姫君のクビは、大臣のクビにだまされました。

大臣のクビは、月のない夜、姫君のクビの、

恋する人のクビのふりをして、一緒のお布団に入りました。

その後、姫君のクビが、だまされたことに、気がつきます。姫君のクビ

は、悲しくて泣きだしました。

姫君のクビは死のうとしますが、結局大臣のクビの愛人となりました。

二人のクビは、お酒を飲んで、恋を楽しみます。

姫君のクビも、大納言のクビも、毛がぬけ、肉がくさり、骨がみえています。

首から上全体を、クビと呼びます



齒の骨と齒の骨が噛み合って音が鳴り、くさった肉がペチャペチャくつつき合います。鼻もつぶれ、目の玉もくりぬけていました。

二人の顔の形がくずれるたびに、女は大喜びで、高い声をだして笑いました。「ほれ、ホツペタを食べてやりなさい。ああおいしい。

姫君の喉もたべてやりましょう。

ねえ、ほら、ウンとかじりついてやれ。」

女は笑います。綺麗な笑い声です。



男は都みやこが嫌いきらでした。都みやこになじめない気持きもちちでいっぱいでした。

彼は、都みやこでは、たくさんの人から、ひどいことを言われ、ひどいことをされました。

でも、男は何よりも、退屈たいくつなのが苦くるしかったのです。

「人間にんげんどもというものは退屈たいくつなものだ。」

と彼は思かいました。

「都みやこは退屈たいくつなところだなア。」

と、彼は彼かれはビッコの女に言いいました。

「お前は山へ帰りたいと思おもわないか？」

「私わたしは、都みやこは退屈たいくつではないからね。」

と、ビッコの女は答こたえました。

都にも山がありました。山から都が一目で見渡せます。

「なんというたくさんの家だろう。そして、なんという汚い眺めだろう。」と、思いました。

彼は、毎晩人を殺していることを、昼は殆ど忘れていました。なぜなら彼は、人をも退屈しているからでした。

何も興味はありません。

刀で叩くと、クビがポロリと落ちていただけでした。

クビはやわらかいものでした。大根を斬るのと
同じようなものでした。

そのクビの重さの方には驚きました。



女の欲望よくぼうにキリがないので、彼はかれそのことにも退屈たいくつしていたのでした。

女の欲望よくぼうは、終わりおがなく、空を真まっすぐ飛びつづけている鳥のようなものでした。その鳥は疲つかれません。ずっと飛びつづけているのでした。

男は山の上から、都みやこの空を眺ながめています。

その空を、一羽いちわの鳥が、真まっすぐに飛とんで行きます。

空は、昼から夜になり、夜から昼になり、それがくりかえしつづきます。

男は、ずっと続つづくこれに、納得なっとくすることができません。

その先の日、その先の日、その又先またの日、ずっとつづくりかえしを考えます。彼の頭かれは割われそうになりました。それは、疲つかれたのではなく、考えくの苦しきくるのためでした。



家へ帰ると、**女**はいつものように、クビで遊んでいました。彼の姿を見ると、**女**は男に言い
ました。

「今夜は、白拍子しらびょうし（踊り子おどりこ）のクビを持ってきておくれ。とびきり美しい白拍子のクビだ
よ。」

彼は答えました。

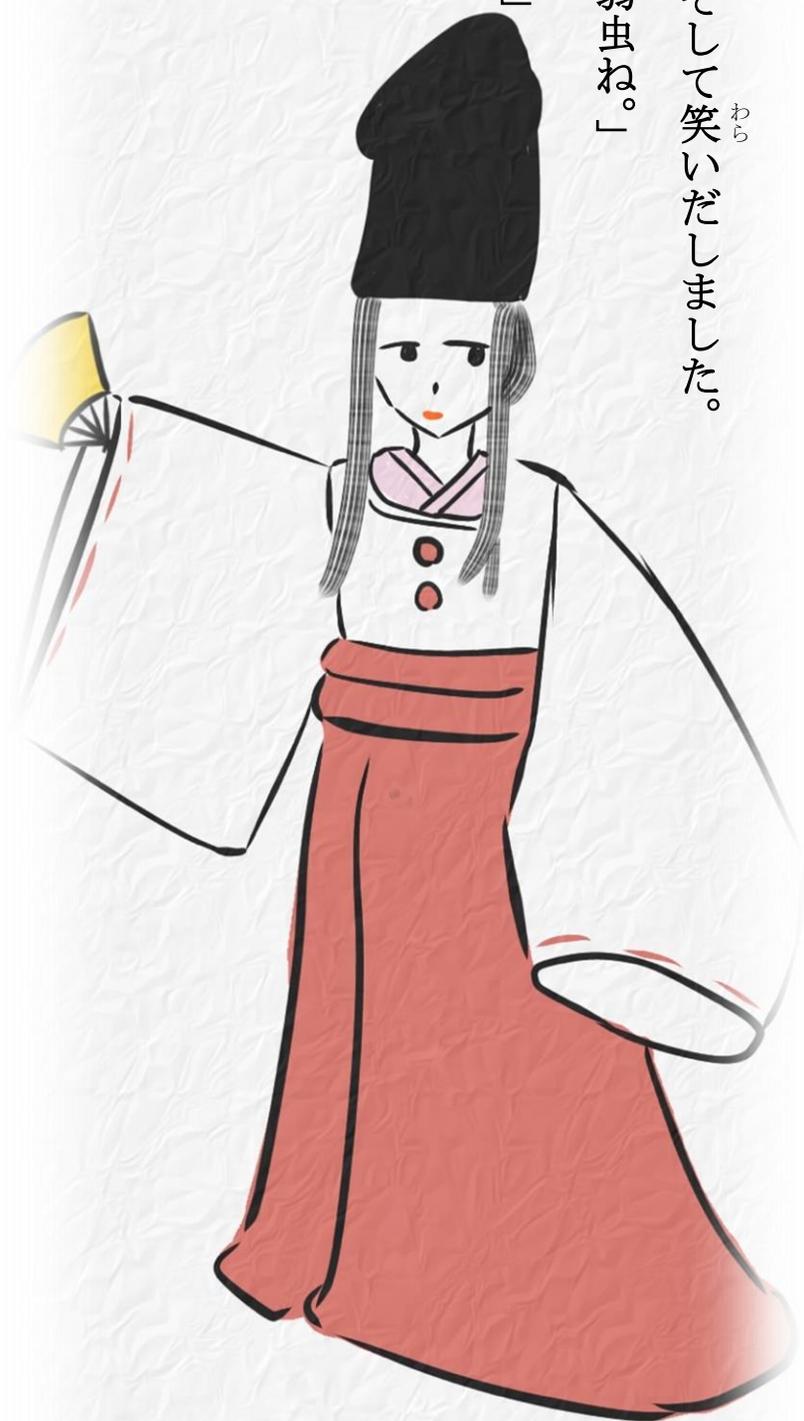
「俺は嫌だよ。」

女はびっくりしました。そして笑いだしました。

「おやおや。お前もただの弱虫ね。」

「いや、弱虫じゃないのだ。」

「じゃ、何さ？」



「終わりが無いから嫌いやになったのさ。」

「あら、おかしいね。なんでも終わりが無いものよ。毎日毎日まいにちまいにちごはんを食べて、終わりが無いじゃないか。毎日毎日まいにちまいにちねむって、終わりが無いじゃないか。」

「それと違うのだ。」

「どんな風ふうに違うのよ。」

男は、返事へんじができませんでした。けれども、違ちがうと思いました。女まに負けるのが嫌いやで、外へ出ました。

「白拍子しらびょうしのクビをもつておいで。」

女まの声が後ろから呼びかけましたが、彼かれは答えませんでした。

彼は、**「どんな風に違うのだろう。」**と、考えましたが分かりません。

だんだん夜になりました。彼はまた、山の上へ登りました。もう空も見えなくなっていました。

彼は気がつくのと、空が落ちてくることを考えていました。

空が落ちてきます。

彼は、苦しんでいました。**女**を殺そうか、迷っているからです。

終わりのないくりかえしは、**女**を殺すことによって、止めることができます。

そして、空は落ちてきます。

彼は、ホッとすることができません。

しかし、彼の心臓には、穴があいているのでした。

彼の胸から、鳥の姿が飛び去り、消えているのでした。

「あの女が俺なんだろうか？そして、空をずっと、まっすぐに飛ぶ鳥が、俺自身だったのだろうか？」

と、彼は考えました。

「女を殺すと、俺を殺してしまうのだろうか？俺は何を考えているのだろうか？」

なぜ空を落とさねばならないのか、それも分からなくなっていました。

考えるだけで、苦しくなりました。

夜が明けました。彼は、女のいる家へ戻る勇気がありませんでした。そして数日、山の中を歩きました。

ある朝、目がさめると、彼は、桜の花の下に寝ていました。

その桜の木は、一本でした。

桜の木は満開でした。

彼は驚いて飛び起きましたが、それは、逃げだすためではありません。なぜなら、たった一

本の桜の木でしたから。

鈴鹿の山の桜の森も、満開にちがいません。

彼は、なつかしさにわれを忘れ、考え込みました。



「山へ帰ろう。山へ帰るのだ。なぜこの単純たんじゆんなことを忘れていたのだろうか？そして、なぜ空を落おとすことなどを考えていたのだろうか？」

彼は、悪夢あくむからさめた思いがしました。今まで失うしなっていた、山の匂においがありました。

男は家へ帰りました。

女は嬉うれしげに彼かれを迎むかえました。

「どこへ行っていたのさ。無理むりなことを言って、お前まへを苦くるしめてすまなかったわね。でも、お前まへがいなくなつてからの、私わたしの淋さびしさもわかつておくれな？」

女がこんなにやさしいことは、今までにないことでした。

男の胸むねは痛いたみました。もうすこしで彼の決意けついは、とけて消きえてしまひそうです。けれども、彼かれは決心けつしんしました。

「俺おれは、山へ帰ることにしたよ。」

「私を残してかえ？」

女は怒りました。その顔は、裏切られた悔しさでいっぱいでした。

「お前は、いつからそんなひどい人になったのよ？」

「俺は都がきらいなんだ。」

「私が一緒にいてもかえ？」

「俺は、都に住みたくないただけなんだ。」

「でも、私がいるじゃないか。お前は、私が嫌いになったのかえ？ 私は、お前のいない間、

お前のことばかり考えていたのだよ。」

女の目に、涙がみえました。女が泣いたのは、初めてのことでした。

女はもう、怒っていませんでした。男は、ゆっくりと自分の考えを口にしました。

「だってお前は、都でなきや住むことができないのだろう。俺は、山でなきや住んでいられないのだ。」

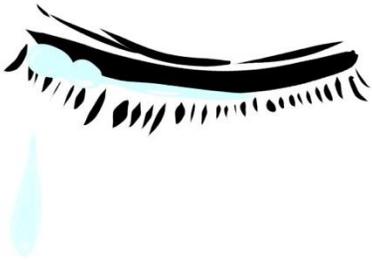
「私はお前と一緒にでなきや、生きていられないのだよ。私の思いが、お前には分からないのかえ？」

「でも俺は、山でなきや住んでいられないのだぜ。」

「だから、お前が山へ帰るなら、私も一緒に山へ帰るよ。私はたとえ一日でも、お前と離れて生きていられないのだもの。」

女の目は、涙でいっぱいでした。

男の胸に顔をあてて、涙をながしました。



たしかに、**女**は男なしでは、生きられなくなっていました。

新しいクビは、**女**のいのちでした。そして、そのクビを、**女**のために持つてきてくれるのは
彼かれだけでした。

彼は、**女**のいちぶ一部でした。

女はそれを、放はなすわけにはいきません。男のノスタルジイがみたされたとき、
再ふたび都みやこへ戻もどつてこられると、**女**は思っていました。

山賊さんぞくは、女にに問といます。

「でも、お前は山で暮くらせるかえ？」

「お前と一いっしょ緒なら、どこでも暮くらすことができるよ。」

「山には、お前の欲ほしがるようなクビがないのだぜ。」

「お前とクビと、どっちか一つを選えらばなければならぬなら、私わたしはクビをあきらめるよ。」

夢ゆめではないかと、男は考えました。あまりに嬉うれしすぎて、信しんじられないからでした。

彼の胸は、新たな希望でいっぱいでした。その訪れは突然で、さっきの苦しい思いが、もうどこかへいっていました。

彼は、昨日までの女が、こんなにやさしくはなかったことも忘れませんでした。

今と明日があるだけでした。

二人はすぐに出発しました。

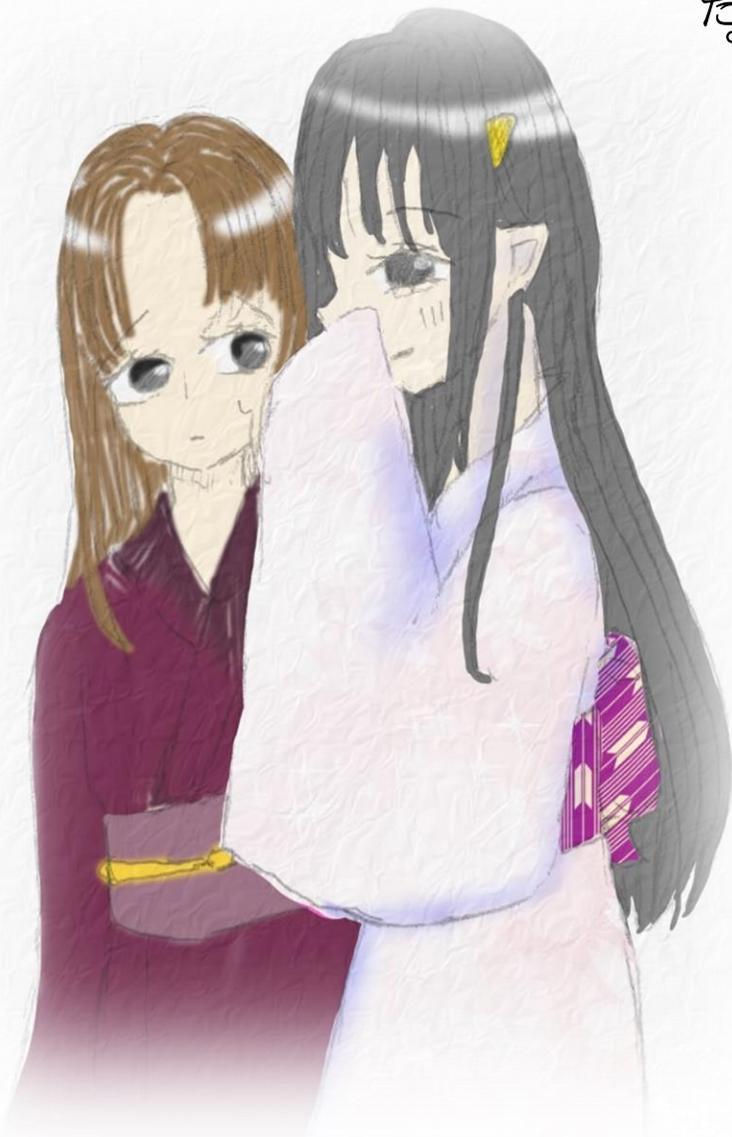
ビッコの女は、都に残すことにしました。

そして出発のとき、

女はビッコの女に向かつて、

「じき帰ってくるから待っておいで。」

と、言い残しました。



目の前に、昔の山々の姿が現れました。

昔の道を通ることにしました。

その道はもう人は通らないので、ただの林になっていました。

その道を行くと、桜の森の下を通ることになるのです。

「背負っておくれ。こんな道のない山坂は、私は歩くことができないよ。」

「ああ、いいとも。」

男は、女を背負いました。

男は、初めて女と出会った日のことを思い出しました。

その日も彼は、女を背負って、峠のあちら側の山道を登ったのでした。

その日も幸せでいっぱいでしたが、今日の幸せは、もっと大きいものでした。

「はじめてお前に会った日も、オンブしてもらったわ。」

と、女も思いだして、言いました。

「俺も、それを思いだしていたぜ。」

男は、嬉しそうに、笑いました。

「ほら、見えるだろう。あれがみんな、俺の山だ。谷も木も、鳥も雲まで俺の山さ。山はいい

なあ。走ってみたくなくなるじゃないか。都では、そんなことはなかったからな。」

「初めての日は、オンブして、お前を走らせたものだったわね。」

「ほんとだ。ずいぶん疲れて、目がまわったものさ。」

男は、桜の森の満開の下のおそろしさを、忘れてはいませんでした。

しかし、この幸せな日に、あの森の満開の下は怖いものではありません。彼は恐れていませ

んでした。

そして桜の森が、彼の目の前に現れてきました。

まさしく、一面の満開でした。

風に吹かれた花びらが落ちていきます。

地面には、たくさんのお花びらが落ちていました。

「この花びらはどこから落ちてきたのだろうか？」

花びらが落ちたとは思えない満開の花が、頭の上に広がっていました。



男は、満開まんかいの花の下へいきました。

あたりは静しずかで、空気がだんだん冷つめたくなるようでした。

彼はふと、女かれの手が冷つめたくなっているのに気がつきました。

そして不安ふあんになりました。

そのとき、彼は分かれかりました。

女おにが鬼であることを。

突然とつぜん、冷つめたい風が、どつと、花の下の、すべての方ほうこう向から、吹ふきよせてきました。
花の下は、どこまでも、どこまでも、続つづいているのでした。

男の背中にくっついていてるのは、全身が紫色の、顔の大きなお婆さんでした。
その口は耳までさげ、髪の毛は緑でした。
男は走りました。

鬼女を振り落とそうとしました。

鬼の手に力がこもり、彼の喉をしめました。

彼の目は、だんだん見えなくなってきました。

彼は夢中でした。全身の力をこめて、鬼の手をゆるめました。



鬼おにの手の隙間すきまから首をぬくと、背せなか中をすべって、鬼おには落おちました。
今こんど度は、彼かれが鬼おににとびかかる番でした。
彼かれは、鬼おにの首をしめました。

そして、彼かれがふと気き付づいたとき、
女めはすでに死しんでいました。



彼の目は、霞んでいました。

彼は、大きく目を見開こうとしました。

しかし、目の前にあるものを信じていくことができませんでした。

なぜなら、彼がしめ殺したのは女で、女の死体がそこにあったからでした。

彼の呼吸はとまりました。彼の力も、彼の頭の中の考えも、すべてがとまりました。

女の死体の上には、すでにいくつかの桜の花びらが落ちていました。

彼は、女をゆさぶりました。

呼びました。

抱きました。

彼は泣きました。

たぶん彼がこの山に住み始めてから、この日まで、泣いたことはなかったでしょう。

そして、彼が我にかえったとき、彼の背には、白い花びらがつもっていました。

そこは桜の森の、ちょうどまんなかのあたりでした。

まわりは、花にかくれて、奥の方は見えませんでした。

いつものような怖れや不安は、消えていました。

花の涯から吹きよせる冷たい風もありません。

ただ、花びらが散りつづけているばかりでした。

彼は初めて、桜の森の満開の下に座っていました。
いつまでもそこに座っていることができます。

彼にはもう、帰るところがないのですから。



桜さくらの森まんかいの満開まんかいの下の秘密ひみつは、誰だれにも分かりません。

あるいは、「孤独こどく」というものであったかもしれません。

なぜなら、男おとこはもはや、孤独こどくを恐おそれる必要ひつようがなかったからです。

彼かれそのものが、孤独こどくそのものでありました。

彼は初はじめて、周まわりを見回みまわりました。

頭上かみに花はながありました。その下に、ひっそりと終おわりのない虚空こくう（何なにもない空間くうかん）が満みちて
いました。

花はなが降ふります。

それだけのことです。

ほかには、何なにの秘密ひみつもないのでした。

しばらくして、彼は、何かなまあたかなふくらみを感じました。そしてそれが、彼自身の胸の悲しみであることに気がつきました。

花と虚空の冷たさにつつまれて、すこしだけあたたかいそのふくらみが何か、すこしずつ分りかけてくるのでした。

彼は、女の顔の上の花びらを取ってやろうとしました。

すると、彼の手の下には、降りつもった花びらばかりがありました。

女の姿は消えて、ただいくつかの花びらになっていました。

そして、その花びらをどけようとした彼の手も、彼の身体も、もはや消えていました。

あとには、花びらと、冷たい虚空がはりつめているばかりでした。

タイトル	にほんご多読の本 レベル 5 『桜の森の満開の下』 原作 坂口安吾 原作元データ 青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/001095/files/42618_21410.html
文・イラスト	蘭塾 チーム・ぷりきゅあ+のん https://www.ashitamirai.org/
発行	蘭塾 https://www.ashitamirai.org/
制作日	2022年12月5日

©オランダ日本語教師会 2022
無断転載・引用は禁止します。

作品の時代背景と物語の雰囲気を考慮した結果、一部、現在では差別的とみなされる言葉が含まれている可能性がございますが、原作の意図を尊重し取り入れたことをご了承ください。

